＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中央1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料

第101号

毎月発行

発行 2020年（令和2年）10月16日　金曜日

2020年（令和2年）10月16日　金曜日

【当新聞発行責任者兼編集長兼記者紹介】

【砂越　豊】

宮城県生まれ、67歳でありながら新人の歴史発掘映像作家兼プロデューサー。来月には、3作目の、古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像【奪われた古代鉄王国】の上映予定。新型コロナ禍を乗り越えて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。

今回号から名称変更・・・『東北再興』スタート

目指す東北再興とは何か？
これからの具体的な活動とは？

『東北再興』って何だ？

以前からお知らせしていたように、今回号から当新聞の名称を『東北再興』に変更する。

「東北復興」は、あの大震災の連想から分かりやすいが、「東北再興」って何だ、すごく時代錯誤の響きがあるのではないかという声がすぐにも聞こえてきそうである。

江戸時代でもあるまいし、断絶した武家再興を、現代の東北にも応用しようというのか、そうでなければいったい、この名称変更で何を考えているのか、との声も聞こえそうだ。

「再興」に込めた思い

再興にはさまざまな意味があるが、この名称変更により目指すのは、新聞名称の英文表記にあるように、「RE-CREATE」を目指すということである。

「RE-CREATE」の意味は、「再創造する」、「再現する」、「改造する」、「造り直す」ということである。

つまりは、「東北を再創造する」、「東北を再現する」、「東北を改造する」、「東北を造り直す」ということで、これを目指すということである。

非常に大きな枠組みで東北をあらためて見つめ直し、じっくり考え、変革していこうということである。

「東北を再創造する」

当新聞は以前から、東日本大震災以前から、東北が超長期のだらだらした衰退を続けていることを指摘し続けてきた。

したがって、大震災で受けたダメージを回復するだけでは、従来の流れを断ち切るような東北の活性化はむずかしいと考えている。

新たな構想により、東北をまったく新しく創造するようなレベルの大改造が必要だと考えている。

「東北を再現する」

東北再現というのはいったい何を再現しようというのか、再現すべき理想形の東北など見当たらないとの反論が予想される。

これも最近の当新聞の主張を眺めていただければお分かりいただけると思う。

今から約千三百年前の、大和朝廷に蹂躙され、支配される前の状態を現代に蘇らせるということを目指す。

千三百年前の古代に戻って何をするのかと言われそうだが、何もその古代の時代にタイムスリップするということではない。

その時代には、独自の東北文化があった。そして自主独立だった。他地域を攻撃することもなかった。平和な時代だった。産業も存在した。大和朝廷が武力を用いても欲しがるような産業があった。日本海北部を中心とした海外交易もあり、その歴史も長かった。中央集権的発想もなかった。今盛んに言われる分権思想がすでにあった。自然を畏れ、自然を敬う生活があった。

それらを現代日本に適合した形で復活しようということである。

「東北を改造する」「東北を造り直す」

東北を「再創造」し、「再現」するためには、いまのままでは不都合な部分がたくさんある。

そのための「改造」が必要であり、「造り直す」必要がある。

こうした事どもを包含したのが『東北再興』である。

この作業には発想の大転換が必要である。ちょっとしたアイディア出しでは間に合わない。

壮大な枠組みのなかで発想しなければならない。

東北の歴史掘り起こし

東北古代史を少しでも掘り起こせば分かることだが、いま流布されている東北古代史は、時の権力が長い間に作り上げた東北古代史である。

それは、ほとんど捏造といってもよいレベルと考えている。

東北古代史に限らず、その後の歴史も同様である。

時の権力に都合の悪い部分は隠され、自分たちに都合よく書き換えられ、時には真実とは真逆な歴史となっている。

それを掘り起こして、かつ、散り散りになった歴史の断片をつなぎ合わせ、埋もれた歴史を掘り起こしてつなぎ合わせて真実の歴史を「発掘」していく作業は不可欠である。

それが『東北再興』には不可欠の作業であり、一番に取り組むべき作業である。

それなしには、「東北を再創造する」ことも、「東北を再現する」ことも、「東北を改造する」、「東北を造り直す」こともできない。

非常に長期間に亘って蹂躙された東北にはことのほか重要なステップである。

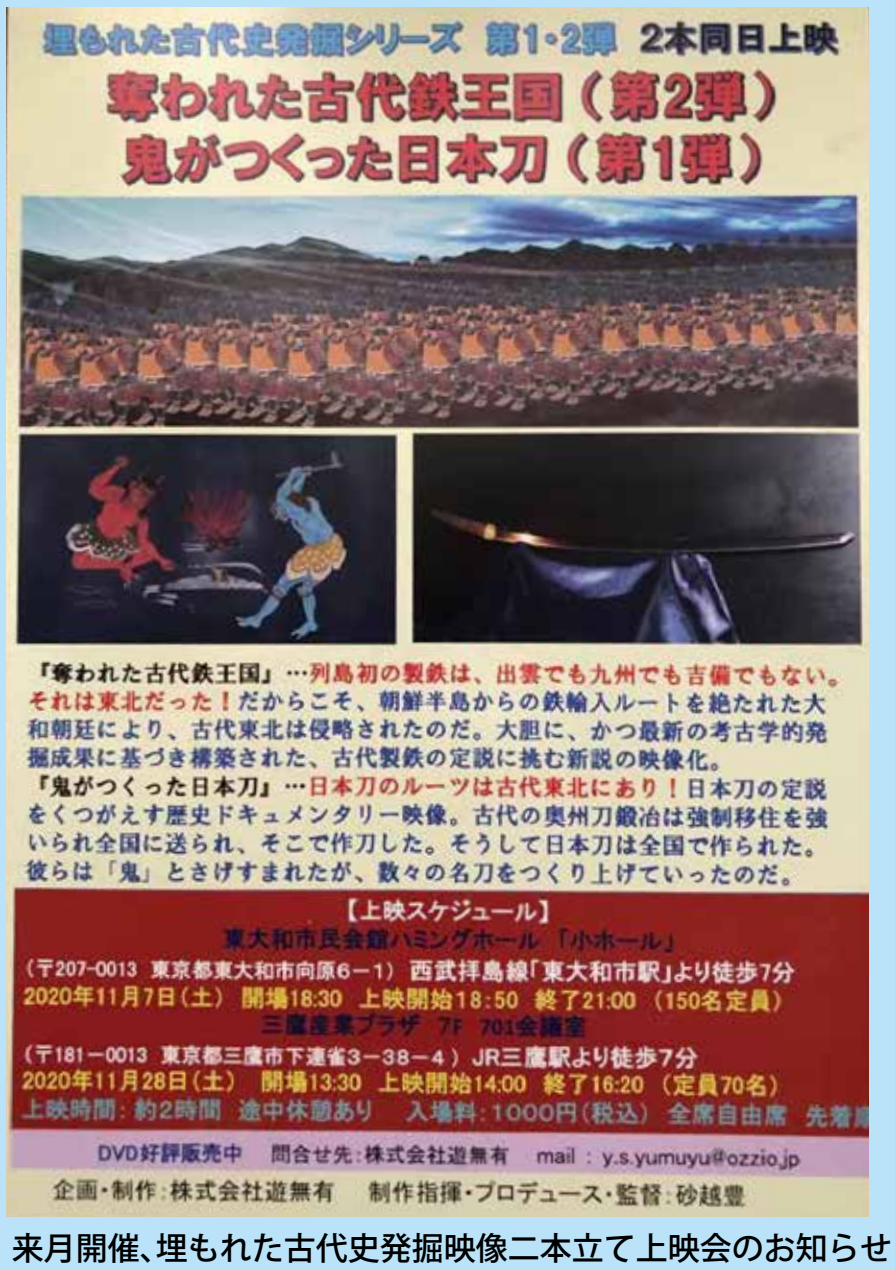
いま流布されている東北古代史とそれに続く歴史をベースに発想したのでは明るい展望を描くのは至難の業であると断言してもよい。どこにも「出口」が見いだせないという絶望感に襲われるにちがいない。

新たな人材を受容せよ

こうした作業のためには、様々な異能の人材を「外から」受容しなければならない。

いまいる東北の人材だけでは不足である。

受容した異能人材といまいる人材とが融合して、新たなアングルから東北を見つめ直し、その歴史を掘り起こしながら、「東北を再



来月開催、埋もれた古代史発掘映像二本立て上映会のお知らせ

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

創造する」ための新たなコンセプトを打ち出し、「**東北を再現する**」ための斬新なアイディアをひねり出し、そして「**東北を改造する**」、「**東北を造り直す**」ことを実践していくのである。

「ようこそ東北へ、ようこそわがまちへ」運動の提唱

先日、テレビを見ていたら、ある地方で「ようこそわがまちへ」という標語を前面に打ち出し、移住者を受け容れようという動きがあったのをとても新鮮に感じた。

よそ者を受け容れる際に地方のまち全体が身構え、他方、新天地で不安な心持の移住者が地方のまちの入り口を前にしてたたずむような対立構図、緊張の構図はいただけない。

最初から失敗の種を包含しているといえる。

だからこそ、この標語で双方が打ち解けやすくなると思うのだ。

東北でもこの標語を採用する運動が起きてもいいのではないか。

そして、「**ようこそ東北へ、ようこそわがまちへ**」と、東北全体という大きな枠でだけではなく、「わがまち」というレベルまで落とすことである。

そうなると、移住者にとっては、単なる標語ではなく、とても身近に感じられるのではないか。

そして移住者が増加していくのではないか。

東北の閉鎖性打破

どの地方もそうであるが、他地域に対しては閉鎖的な傾向が強い。

大震災ボランティアからも、東北の大震災被災地の閉鎖性について聞いたことが一度や二度ではない。筆者にもこれに関しては苦い経験がある。

よくあるパターンかもしれないが、「地方のまちについて何か提言しようと思うならば、移住して、まちに受け入れてもらってから発言せよ、そうでなければよそ者の声には耳を貸さない、余計な発言をしないでくれ」というものである。

地方の閉鎖性の最たるものと考えているが、理屈ではなく、異物への生理的な拒否反応なのだろう。

しかし、この姿勢をいつまでも続けていたら、そのまちも、東北も衰退していくのは目に見えている。

すでにそのことは予測の段階を飛び越え、シャッター通りも越えて、無人のまちがあちこちで出現しているではないか。

人口減少は地域住民が進んで解決しなければならない大きな課題である。

しかし、生理的な拒否反応が先行して、住人たちを支配してしまうのであろう。まことに残念なことであり、早急にこの課題を、東北全体で意識して取り上げるべきである。

地方のまちは地方住民のものではない

変なことを言うと思われるかもしれないが、これが地方の閉鎖性の骨格を形成していると思うのである。

地方のまちには歴史があって、それぞれの時代に生きた人々がいた。

地方のまちはその人たちのものでもある。

また、その地方のまち出身者で、いまはそこに居住していない人たちがいる。

ある意味で、地方のまちはその人たちのものでもある。

さらに範囲を広げれば、その地方のまちに深くかかわった他の地域の人たちもいる。

その地方のまちを旅で訪れた人々もいる。

地方のまちには、このように多くの人たちが関わっている。それで成り立っているのである。

なのに、いまいる住人だけが、あたかも自分の持ち物のようにまちを扱うのはおかしいし、傲慢であるとさえ考える。

筆者は、この日本列島は大昔から移民の島であると考えている。

その伝統は長く続いており、いまでもそうであると思っている。

その伝統にしたがえば、現在の地方の閉鎖性は異常に映る。

東北よ、混血せよ！

またまた刺激的なことを言うと思われるかもしれないが、筆者は本気である。

これだけ人間の流動性が高まっている現代において、閉鎖的姿勢を続けるのは時代にそぐわない。

そのまちの衰退を予告しているようなものだ。

だから、純潔な東北人、純潔なまちの住人などというありもしない幻想を捨て、他地域からの人材と精神的に混血せよ、と言いたいのである。

東北人とは、これから発掘されるであろう東北の真の文化を担う者のことであり、昔から東北に住んでいる者のことではないと言おう。

戦国時代の東北武士たちも関東からの移住者たちだったのは周知の事実である。

しかし、そのことをすっかり忘れている。

こうしたことを忘れてはならない。

大崎市での『鬼がつくった日本刀』上映会

話は転じて、先月末、宮城県大崎市で『**鬼がつくった日本刀**』を上映した。

撮影地が大崎市中心であったので、当然ながらその地で上映するのが筋であろうと考えての上映会開催であった。

地元のメディアにも協力してもらったおかげで、コロナ禍にもかかわらず多数の方々にお出でいただいた。

自分のまちの歴史を知りたかったということもあったのであろうか。

上映後に何人かの方とお話しする機会があったが、自分のまちにこんな歴史があったとは知らなかった。来てよかったと告げられた。まことに製作者冥利に尽きることであった。

第三作は『奪われた古代鉄王国』

コロナ禍のなかで撮影した第三作目が『**奪われた古代鉄王国**』で、来月には前作と一緒に二本立ての上映会を都内で予定している。

この映像は、古代の東北に製鉄拠点群がたくさん存在しており、鉄の供給路を絶たれた時の朝廷がそれを奪取しようとして東北を侵略したのが、日本で一番長い戦争である『三十八年戦争』であることを示した映像である。

これらは、前述の「東北の歴史掘り起こし」の一環である。

この作業はこれからも、当新聞活動と並行して推進していこうと考えている。

そこからはきっと、「東北再興」のビジョンが立ち現れてくるにちがいない。

【鬼がつくった日本刀】・・・9/26・宮城県大崎市上映の模様①

【鬼がつくった日本刀】・・・9/26・宮城県大崎市上映の模様②

【奪われた古代鉄王国・・・イラスト①】

奪われた古代鉄王国・・・イラスト②】

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

第74回

水産業再興のための料理レシピ紹介

【タラの小松菜ソースがけ】

郷土料理愛好家
松本由美子氏

―材料(２人分)―　①タラ切り身　２切れ(200g)、塩　小 1/3、小麦粉　大２、オリーブ油　大１、②小松菜　1/2 束(100g)、にんにくみじん切り　1/2 かけ、レモン汁　小 1/2、オリーブ油　大１、塩　小 1/3

―料理方法―（１）小松菜ソースを作ります。小松菜を 1㎝巾に切り、②の調味料を混ぜ合わせ、５分ほどおく。（２）タラは、塩をふり小麦粉をまぶし、フライパンにオリーブ油をしいて両面に焼き色がつくように２～３分ずつ焼く。（３）器に魚を盛り、小松菜ソースをかける。

―オリーブ油の香ばしいムニエルです。小松菜ソースのレモン汁が爽やかな味覚になってます。―

（松本談）

ぼちぼち再開できるかな？みなと再会できるかな？
東北地酒、いろんな銘柄が目に浮かぶ、呑みたい！
【依然として第 43 回三陸酒海鮮会代替日程未定のまま】

３月 14 日開催のはずだった第 43 回目の三陸酒海鮮会から、すでに半年も経ちましたが、依然として代替日程が未定のまま推移しております。美味しい東北地酒への恋しさが狂おしいほどに募っております。とはいえ、状況は大分変化してきておりますぞ！それまでは以前の写真画像のみで何とか耐えてください。再びお会いできる日を楽しみに！忘年会までには再開できると思いますが・・・

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

写真でお伝えする
東北の風景

新型コロナ禍
自粛症候群
「対応薬⑤」

写真撮影

尾崎匠

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

新型コロナで地域満足度が激変？

どこの都道府県がストレスが少ないかの調査

一般社団法人ストレスオフ・アライアンスは、合同会社エンディアンと共同で「ココロの体力測定」調査を実施し、その結果を「ストレスオフ県ランキング二〇二〇」として八月二五日に公表した。これは、緊急事態宣言明けの七月二三日から二七日にかけて、全国一〇万人の男女（二〇から六九歳の男女各五万人）にインターネットを通じて調査したものであるということである。その結果、男性では青森県（ストレスオフ指数三二・六）、山口県（同三二・二）、山梨県（同二七・三）が「ストレスオフ県」のトップ三、女性では鳥取県（同五六・二）、滋賀県（五二・二）、山口県（四九・五）がトップ三という結果だった。

「ココロの体力測定」調査では、厚生労働省のストレスチェックB基準に照らし合わせて回答者のストレスレベル割合を算出している、としており、第一位だった青森県の男性と鳥取県の女性は、全国平均と比較し「低ストレス者（三九点以下）」の割合が高く、逆に「高ストレス者（七七点以上）」の割合は低い傾向が出ており、その結果が他の都道府県よりも高いストレスオフ指数に貢献していると考えられるとのことである。

面白いのは、男女でストレスオフ指数が高い都道府県が異なっているということで、ベスト一〇を見ても、男女ともランクインしているのは山口県（男性二位、女性三位）と和歌山県（男性、女性とも四位）くらいで、その他は男女どちらかだけがランクインしている。なぜ男女でストレスオフ指数の高い県が違っているのか、またなぜ総じて女性の方がストレスオフ指数が高いのか、については分析されていないのでその理由は不明である。

新型コロナウィルスへの不安度についても調査されており、それぞれ一位となった青森県の男性、鳥取県の女性の不安度は首都圏の男性や女性に比べて低いという結果で、またこの新型コロナウイルスの感染拡大に伴う自粛に関連する生活の不満が少ないという結果も出ており、そうしたことがストレスオフ指数の高さの要因の一つである可能性があるとされていた。

また、リラックス方法についても特徴があり、青森の男性で全国平均よりも多かったリラックス方法は、BBQ（全国平均の二・〇一倍）、温泉（同一・七二倍）、靴下を脱いで裸足になる（同一・四二倍）などとなっていた。鳥取の女性では、温泉（同一・四三倍）、機能性・栄養ドリンク（同一・二九倍）、指揮み（同一・二三倍）などとなっていた。男女共にランクインしていたのは温泉だが、そう言えば青森も鳥取も名湯と呼ばれる温泉がある温泉県である。そうした環境が身近にあるかどうかも、ストレスの多寡に大きく関係するのかもしれない。

ちなみに、東北では男性一位の青森県は女性二五位、岩手県は男性一九位、女性三七位、宮城県は男性三〇位、女性三一位、秋田県は男性三六位で女性は四六位、山形県は男性三二位、女性三九位、福島県は男性三八位、女性は三六位であった。大まかに見て、南東北三県は男女ともだいたい同じ位置にランクインしているのに対して、北東北三県は総じて男性の順位の方が女性よりも高いという結果となっていた。

新型コロナウイルスの影響の多寡

さて、興味深い比較も行われている。今年は新型コロナウイルス感染症拡大により、健康や日常生活、仕事など暮らしにさまざまな影響が出ている。先に紹介した結果は、その影響も反映しての結果と捉えられるが、今回はこの「ココロの体力測定二〇二〇」を前年の調査結果と比較して、その順位の変化を「地域満足度」の変化として都道府県ランキングにまとめられている。

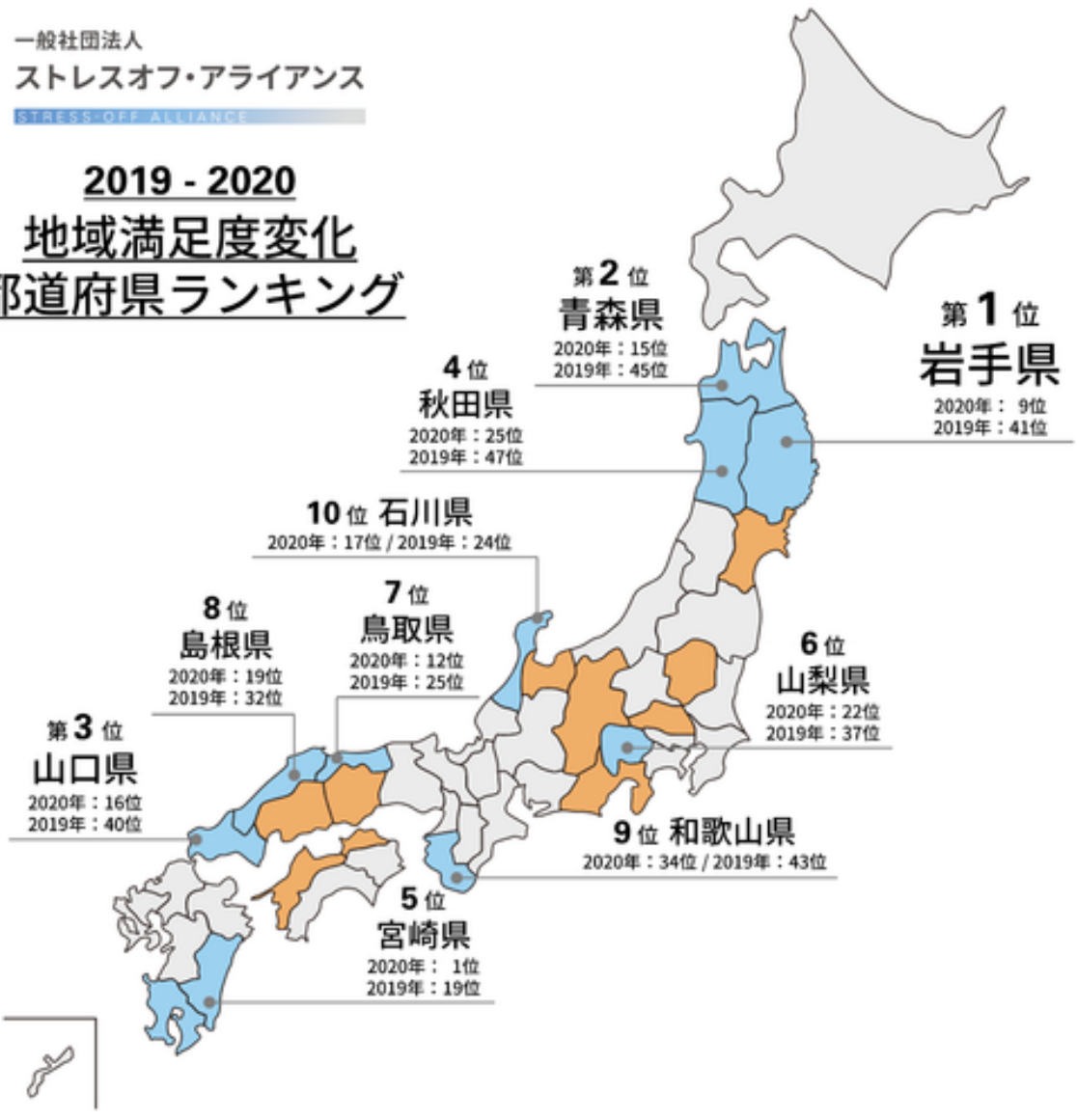
これは男女をまとめた結果で比較しているようだが、それによると二〇一九年に比べて二〇二〇年のランクが上昇した度合いは岩手県が一位、青森県が二位で、三位の山口県を挟んで秋田県が四位と、北東北三県が上位を占める結果となっていた。これに対して、ランクが下降した度合いが最も大きかったのは宮城県であった。トップ一〇には他に鳥取県や島根県なども入っており、全体的に地方が善戦しているように見えるが、四五位に広島県が入っており、宮城県同様、地方の中核都市が苦戦している印象である。

昨年と大きく変わったこととしてはやはり新型コロナウイルスの存在が挙げられるが、それが他の都道府県と比べて相対的に順位を上げることになったのかもしれない。一方、宮城県は首都圏や関西圏などに比べれば感染者数は少ないものの、周辺の東北の他県と比べると感染者数が多かったことが不安につながり、順位を落とすことにつながったとも考えられる。

その点で印象的なのが東京都で、日本一感染者数が多いにも関わらず、順位は昨年と変わらず、全体として二一位である。新型コロナウイルスへの不安度は、全国平均二七・二パーセントを上回る三二・一パーセントだったものの、自粛期間中の過ごし方では「意外と楽しめていた」と答えた人の割合が全国平均の一・三八倍で、その中身として「オンライン飲み会」、「在宅勤務」、「一人暮らし」などが挙げられていたとのことである。

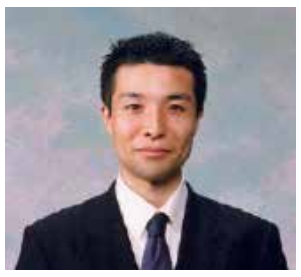
レポートでも、地域満足度の高さと、新型コロナウイルスによる自粛期間との関連を見ているが、地域満足度が低い人の八八・三パーセントが自粛期間の過ごし方に不満を感じており、これは地域満足度が高い人の三四・八パーセントと比べて大きな差があったとのことである。すなわち、地域満足度の高さと自粛期間の満足度の間には関連があったということである。

こうして見てくると、もちろん新型コロナウイルスについては用心を怠ってはいけないが、それに伴う生活の変化をどのように捉え、そこで生じたストレスをどのように解消したか次第で、自分たちの生活の質や満足度は大きく変わってくるということが言えそうである。北東北三県では、元々感染者数が他地域より少なく、新型コロナウイルスに対する不安の度合いも他地域に比べれば低かったということもあるのかもしれないが、それに加えてストレス解消のための環境があったり、ストレス解消のための行動を積極的に行ったりということで、結果的に新型コロナウイルスに伴う生活のストレスを最小限に抑えられていたように見える。残念ながら昨年の順位との差が全国ワーストとなってしまった宮城県も北東北三県をお手本に、自分たちの生活の満足度を上げ、ストレスを下げる工夫や取り組みをもっと行っていく必要がありそうである。まずは靴下を脱いで裸足になるところから（笑）。



執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/
Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

赤いキリギリス

コロナ禍が発生してからのこの半年間、他人の目を気にせず自由に外出できないせいか、真綿で包まれたような、非常に緩い監禁状態に置かれている感覚がつきまとって離れません。

そのためもあり、家の外の様子がストレートに伝わって来ません。ニュースで気温や季節の変化を知ったりすることが増えました。

やはり人間は閉じ込められてしまってはとても苦しい生活になるのだと痛感する毎日が続いています。

こうした状況下で、毎月写真を通して遠野の風景を見るとき、自分がいまどこにいるのかが確認できてほっとします。異常な世界から普通の世界に戻れます。

続石

夕暮れ早池峰山と馬

シリーズ
遠野の
自然

「遠野の寒露」

遠野 1000 景より

山中でボンネットバスに出合う

木の根の階段

石仏

オオイチョウダケ

夕焼け

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

「野営天国」東北にテントを張るという事

長野県・上高地のキャンプ場に熊が出現し、ソロキャンプ中の五十代の女性が襲われ怪我をした、というニュースが八月に流れた時、私はハッとさせられた。

この長野県も含め、富士山の見事な姿を眺望できる山梨県の数あるキャンプ場などを舞台に展開する人気漫画『ゆるキャン△』（あfろ作　芳文社）を、一体どんなものかと読み始めたところだったからだ。

二〇一〇年代に入り、従来からあったものとは違うキャンプ即ち娯楽としての野営行為の形が静かなブームとして広がってきていた。それが「ソロキャンプ」である。要するに、一人用のテントを設営し、独りの時間を楽しむ人が急増したという事らしいのだが、その話を耳にした当初、正直私にはピンとこなかった。

と、いうのも私自身が三〇代に入った二〇〇〇年代から一〇年以上、オートバイにテントを積んで全国を放浪するというような事をやっており、そういうと随分酔狂な趣味と思われるかも知れないが、七〇年代から九〇年代までは大変多くの若者たちが同じような事を実行していて、決して少数派の楽しみではなかったのである。現に、登山用ではない一人用のテントが普通に製造され続けているのであり、近年は激減していたオートバイの旅人らに替わり、ソロキャンプなる新たな趣味の参入者たちによってあらためて脚光が当たる格好になったようだ。

本稿では、個人的なキャンプ旅行体験から東北回帰に至った経緯などを綴りながら、現在のキャンプブームを取り巻く環境や、浮上する課題についても考えてみたいと思う。

＊

「さすらいの旅」というのは、少年の頃からの私の変わらぬ夢であった。と書くと笑われるだろうが、東京に出て何らかの成功を果たすというもう一方の「夢」が容易ならざるものとわかると、私はならばまず実現の容易な夢に取り掛からん、と考えたようで、結果一歩踏み出せばあとは帰りさえしなければ実現できる「さすらい旅」を実行に移してしまったのだった。

嘗て日本の北の最果て・北海道と南の最果て・九州及び沖縄にはオートバイや自転車で長期間一人旅する若者たちが集まり、その貧乏をものともせぬ旅生活をバックアップするように、無料または格安の宿泊施設、そしてキャンプ場が数多く存在していた。

もともと往年の西部劇などを観て、さすらい旅に憧れ始めた私はまさか他ならぬ日本国内でそれをとっくに実現している人々が存在していた事に衝撃を受けた。

特に私をその世界へ実際に誘ったと言えるのが、藤原寛一、斉藤純、賀曾利隆といったオートバイ長期旅行の猛者たる先輩諸氏の存在だった。前二氏は岩手県をルーツとし、賀曾利氏は世界中を走破しながら国内では東北の旅を最も愛し、『ツーリングマップル』（昭文社）の東北版にて二〇年に渡り現在まで案内人を担当している事はこの分野では有名である。

通勤用に使っていた「原付」であるカブを長旅の脚としたのは藤原寛一氏の影響だ。三一歳になっており既に数年前より東京からの東北回帰を考えていたが、敢えて始めに静岡方面へ走り出して九州や沖縄を目指したのは、もしや自分は西日本の方が魅力的に感じるのではないか、つまり己の東北への想いに間違いはないか、という確認の意味もあった。

実際の旅では、当時情報収集下手でキャンプ場を上手く探せなかった事もあり、中国・四国までの西日本はどこか足早に走りぬけて、九州の阿蘇地方に至ってようやくテントでの旅生活に馴染んでいった。沖縄の島々は長い旅を経て辿り着いた日本の漂泊者たちの吹き溜まりであり、まさに越冬地といった様相であった。

島のキャンプ場に築かれたテント村に銘々の小さな城を建て、現地の農作業などの手伝いで旅費を貯めて春になると目指すのが北の大地―北海道であった。

多くの旅人は、茨城県の大洗港から巨大フェリーに乗り込み、北海道へと渡る。

そうでなくても、せいぜい青森のねぶた祭で一騒ぎしてから渡道というのが主流で、つまり東北は通過されがちなエリアであった。

しかし、賀曾利隆は言うのである。自分は今、最も思いを込めて東北を走っている、と。氏によると、東北には他のどの地方にも無い、オートバイでの旅の魅力があるという。それは古来の日本のイメージそのまま の雄大にして素朴な自然が織り成す風景であり、昔ながらの温泉や建築、奥深き魅惑の食を擁した癒しの宿営地であり、そして何よりも出会う東北人の人情（及び女性の美しさ！）であるというのだ。

これらの要素は、多くの若い旅人たちが求めるものとは微妙に食い違っていた。

北海道や九州の阿蘇、そして沖縄の島々にあるのは、どこか日本離れした風土と光景であり、いわば若者たちの未知への好奇心をまさに具現化したかのような世界であった。ところが、東北にあるのはそれとは真逆にも思える、いつか見たような旧き日本の姿なのだ。

しかし、世界中を巡ってきた老練の旅人が最終的に求めて止まぬのが他ならぬ東北での旅だとすれば、多くの旅人たちが辿り着く地としての東北の持つポテンシャルの途方もなさが伺えるのではないだろうか？

さて、オートバイでの旅という世界に遅まきながら参入した私は、後に西日本での旅を終えて東北と北海道の旅を重点的に繰り返すようになった。つまり、日本中を旅しても私の北方指向は変わらなかった訳だが、東京から出発して東北・北海道を両方旅し続けるのなら、どちらかに住んでしまった方がいいのではないか？という事になり、当初の考え通りに「東北回帰」という結論へ至ったのである。

北海道と東北は、以前より兄弟国ともいうべき存在であると感じてきたが、オートバイによる旅の地、そしてキャンプ地としての雰囲気は随分異なったものである。北海道は、多くのライダーに愛されてきた事からもわかるように、アメリカをも彷彿とさせるような壮大、時に幻惑的な風景に富んでおり、広々と開放的なキャンプ場には無料または手頃に利用できるところも未だ多い。東北も同様に利用しやすいキャンプ場が少なくないが、比較的平坦で緩やかな地形である北海道に対して、高原や山中、崖上や湖の小島などキャンプ場の立地も多彩で野趣に富んだ印象がある。何年走り続けても走り尽くす感のない北海道と東北を放浪するうちに、三十代の大半をそんな旅生活に費やした私であったが、仙台に移住後は諸事情で遠方への頻繁な旅が困難となり、キャンプ熱も下火になってしまった。

それから一〇年、知らぬ間にキャンプ・ブームが起こった頃には様々な点で状況が変わっていたのである。

一つは、昨今のソロキャンプブームの主体が、女性であるという事だ。ブームとし

食べ・飲み歩き　in　宮城県

わずか三日間でしたが「宮城」を食べ、飲みました一美味かった！

宮城県大崎市で歴史ドキュメンタリー『鬼がつくった日本刀』を上映するため先月宮城に赴いた。

せっかくの遠出で、日帰りはもったいないので、秋保温泉にでも浸かり、宮城の美味いものを食べて、飲むことにした。

「飲む」といえば、いつもは東北地酒だが、当新聞寄稿者の一人である大友さんの紹介で、仙台駅近くの「夕焼け麦酒園」で東北地ビールを堪能。現地でいただく地ビールは美味い。結果、メニューを「縦断」のピッチャー。蒸しホヤもいける。

いったいどれほど飲んだろうか。これからは地ビール党にもなろうと決めた。

次いで、その近くの「東北カフェトレジオン」でまた地ビール。そして岩手の地酒「AKABU」。ほんとうに美味い。「食べる」は「東北6県プレート」で東北の野菜と海鮮。そしてカキフライ。宮城のカキは美味い。

秋保温泉で食べた「はらこ飯」は絶品だった。また食べたくなる。旅館ではたくさんの料理が出たが、載せきれない。

秋保温泉の名物におはぎがある。地元スーパーで作って販売しているが、駐車場にすごい車。驚いた。

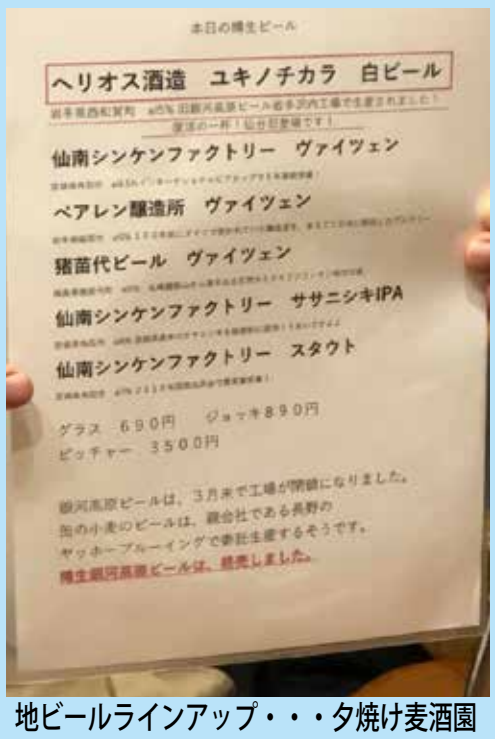
仙台といえば牛タンを忘れてはいけない。筆者は「茹で牛タン」が特に好みである。お店の方に頼んで、特別に「茹で牛タン定食」にしていただいた。美味い。

絶品ーはらこ飯・・・秋保温泉

仙台で AKABU・・・トレジオン

黄金澤・疫病退散・・・秋保温泉

東北 6 県プレート・・・トレジオン



地ビールラインアップ・・・夕焼け麦酒園

白ビール・・・夕焼け麦酒園

カキフライと地ビール・・・トレジオン

名物おはぎ・・・秋保温泉さいち

茹で牛タン・・・喜助

蒸しホヤ・・・夕焼け麦酒園

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.